

Sabbath——その思想・歴史・意義 (1)

村上良夫*

The Sabbath : Its Idea, History and Significance (1)

Yoshio Murakami

Received October 25, 1989

I はじめに

“ 汽車は人間という貨物を載せて、のろのろと進んだ。載せられている不幸な人々は、まるで家畜のように、ぎゅうぎゅう詰めに詰め込まれ、身動きひとつできなかった。よどんだ空気で、息がつまりそうだった。金曜日の午後が過ぎていくにつれて、ナチの輸送車に載せられたユダヤ人たちは、ますます悲惨な状態に落ち込んでいった。

と、突然、ひとりの年老いたユダヤ女性が、たいへんな苦労をしながら体を動かして、持っていた包みをあけた。そして、やっとのことで、彼女は引っぱり出した——2本の燭台と2つのハラー [Sabbath用のパン] を。それらは、その日の朝、家から引きずり出される前に、かろうじて用意したものだった。これらだけを彼女は、携えるに値するものと見なしたのであった。

苦しい思いをしていたユダヤ人たちの顔は、まもなく、Sabbathのろうそくに照らされて明るくなり、“レハードーディ” [Sabbathを女王と見なして迎える儀式] の歌声は、その場を一変させた。Sabbathが、平安の雰囲気満ちて、一同の上に訪れたのである。……”

実際にその場に居合わせ、そして後に強制収容所からの脱走に成功した人物から、直接聞いた話だと、Dayan I. Grunfeld [ユダヤ人思想家・著述家。1900-1975] はこのエピソードを紹介する。そして付け加える、こうしたことは、ユダヤ人の長い歴史の中では、決して珍しいことではない、と¹⁾。

かくも場面を一変させたSabbath (安息日) とは、いったい何であろうか。われわれ日本人には全くなじみがなく縁のないものと思われるかもしれないが、実はそうではない。大学人ならばしばしば耳にする、いわゆるSabbatical year (研究休暇) が、このSabbathからきている言葉であることは言うまでもないが、しかしそれよりも、そもそも毎週の日曜日という週休制度が、実はこのSabbathに由来していると言えるのである。

*教養部

Faculty of General Education

まず、週制度そのものの起源については、月の満ち欠けによる1カ月という周期の、その四分の一から来ているのではないかと、いくつかの仮説があるが、いずれも説得力を欠き、結局のところ旧約聖書に述べられている天地創造の7日間——神が6日間で天と地と海と、その中のすべてのものを造り、7日目に休んだとされること——が最も有力な背景と考えられている²⁾。そして、その第7日目である Sabbath の起源を、バビロニアの占星術や、ケニ人や、バビロンの農事暦や、古代中近東の市日など、さまざまなところに求めようとする試みは、いずれも確たる証拠を欠き、結局は旧約聖書の記述に帰ってくるというのが実状である³⁾。こうして、7日間の週制度、休日を含む1週間という時間単位は、Sabbath を頂点とする古代イスラエルの時間のサイクルに由来すると考えられているのであり、まさに、「7日間というヘブル人の週は、われわれが現に有している休日という人道的なものと共に、ヘブルの宗教精神のユニークな創造物であり、人類文化に対するヘブルの最も重要な貢献の一つである」⁴⁾(A.E. Millgram)と言われ、「安息日は後にキリスト教によって日曜日に移されるが、周期的休日を初めて人類に与え、世界の文化に大きな影響を及ぼしたものとして、高く評価されてよい」⁵⁾(土屋吉正氏)とされるとおりである。

われわれの生活に完全に溶け込んでいるこの“週”という7日間の時間的周期^{サイクル}は、第7日の Sabbath を頂点とする旧約聖書の時間単位を淵源とするものであり、現在の日曜日という毎週の休日そのものも、実はこの Sabbath に由来している。従って、日曜日は本来、きわめて宗教的な色彩を帯びたものであった。そのことは、イギリスの作家 George Gissing の『ヘンリ・ライクロフトの私記』(1903) からもうかがえる——「その意義をどう考えるかは人々によって違うかもしれないが、わが国の安息日は特別な神聖さが漂っていると思うのである。……1週に1回まる1日を世間の日常的な生活から切り離すがよいのだ、日常の心配からも日常の娯楽からも超越させるがよいのだ。狂信のそしりをさんざん受けてきたにもかかわらず、この日曜に対する考えは祝福の多いものであった。」「この周期的な静けさこそ、ほとんどその意味が自覚されなくなったときでさえも、一つの国民にかつて与えられた最上の精神的な贈り物だといってもいいのだ。」⁶⁾

Sabbath は、ユダヤ・キリスト教文明の、きわめて特徴的なものの一つであると言えよう。二十数年前のものであるが、*Journal of Religion and Health* 誌のある論説は、興味深い指摘をしている⁷⁾。それは、日本、韓国、ビルマ、タイ等、アジア各国を回ってみて気がついた最も顕著なことの一つは、これらの国々には“the creative pause of the Sabbath”が欠如していることだ、と言うのである。つまり、店もビジネスも週7日制で営まれており、交通量も日曜と他の曜日とで変わりがないと述べ、ユダヤ・キリスト教的社会ではあたり前の Sabbath は、もともと歴史的宗教的伝統に根ざすものであるが、現代の精神衛生の面からもきわめて重要な意義を有するものであり、アジア諸国にもこの“the custom of the Sabbath, the creative pause”は、もっと受け入れられてよいものではなからうか、と主張しているのである。

Journal of Religion and Health 誌がこのように観察し提言してから、すでに四半世紀が過ぎた。わが国は今、週5日制へと着実に移行しつつある。遠からず学校にもそれは及んでいくに違いない。こうした中で、休日が真に creative pause になりうるかどうか、先ほどのギッシングの感想とも考え合わせて、興味深いところである。

さて、以上見てきたように、われわれには縁がないかに思われるこの Sabbath は、実はわれわれにとってもきわめて密接な関係のある、重要な事柄なのである。われわれが日々それに従って生活を送っている週制度の起源として、また、毎週の休日というものの本来の意味を考えさせてくれる原型として、そして、最初に紹介したエピソードに示されているような、奥深い本質的なものを含む何かとして、われわれの十分な検討に値する大きなテーマだと思われるのである。これには聖書学的・神学的・歴史学的・宗教学的・社会学的な各分野からのアプローチ⁸⁾が必要とされるであろうし、これまでわが国でほとんど注目されてこなかったこのテーマを取り上げるにあたって、どこからどう手をつけたらよいか途方にくれるほどである。ただ何らかの手がかりでも提供できればと、あえて序論的素描を試みるしだいである。

まず、聖書から、Sabbath そのものの由来と本来の意味内容を探り、更に Sabbath 遵守の実際を確認する。次に、Sabbath の歴史的展開を初代教会時代から現代に至るまで、史料に沿って跡づける。最後に、現代のわれわれにとっての Sabbath の意義というものを考察してみる。このような手順をとることにしたい。

II Sabbath の思想—その由来と意味内容、実際

ここでは、Sabbath そのものの由来と本来の意味内容、そしてその実際を、聖書に即して考察してみたい。

A. 十 戒

Sabbath という英語はヘブライ語の שַׁבָּת (シャバト、安息日) から来ており、この言葉は、動詞 שָׁבַת (やめる、休む) と密接に関連していると考えられている⁹⁾。

この Sabbath が正式に規定されているのは、いわゆる“十戒”の第4条であるが、「出エジプト記」と「申命記」とでは、Sabbath の理由づけが異なっている。

安息日を覚えて、これを聖とせよ。6日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。7日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、家畜、またあなたの門のうちにいる他国の人もそうである。主は6日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、7日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた。(出エジプト記 20 : 8-11¹⁰⁾)

安息日を守ってこれを聖とし、あなたの神、主があなたに命じられたようにせよ。6日のあいだ働いて、あなたのすべてのわざをしなければならない。7日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。あなたも、あなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、牛、ろば、もろもろの家畜も、あなたの門のうちにおる他国の人も同じである。こうしてあなたのしもべ、はしためを、あなたと同じように休ませなければならない。あなたはかつてエジプトの地で奴隷であったが、あなたの神、主が強い手と、伸ばした腕とをもって、そこからあなたを導き出されたことを覚えなければならない。それゆえ、あなたの神、主は安息日を守ることを命じられるのである。

(申命記 5 : 12-15)。

よく言われるように、「出エジプト記」のほうは“創造”を安息日遵守の理由とし、「申命記」のほうは出エジプトという“救済”の出来事を理由としている。一見食い違ふように思われるが、しかし共に“rest”〔休み、安息、安心〕に関連していることは明らかであり¹¹⁾、何よりも、両者は相互に補い合いつつ“神に対する人間の依存性¹²⁾”(P.C.Craigie)を強調しているという点では一致している。

このSabbathという制度は、しかし十戒の時に初めて制定されたものではなく、それ以前からすでに知られていたと思われる。シナイ山での十戒宣布の前に、すでにシンの荒野での“マナの奇跡”において、「主の聖安息日」のことが出てきているからである。

6日目には、彼らは2倍のパン、すなわちひとりに2オメルを集めた。そこで会衆の長たちは皆きて、モーセに告げたが、モーセは彼らに言った、「主の語られたのはこうである、『あすは主の聖安息日で休みである。きょう、焼こうとするものを焼き、煮ようとするものを煮なさい。残ったものはみな朝までたくわえて保存しなさい』と」。彼らはモーセの命じたように、それを朝まで保存したが、臭くならず、また虫もつかなかった。モーセは言った、「きょう、それを食べなさい。きょうは主の安息日であるから、きょうは野でそれを獲られないであろう。6日の間はそれを集めなければならない。7日目は安息日であるから、その日には無いであろう」。ところが民のうちには、7日目に出て集めようとした者があったが、獲られなかった。そこで主はモーセに言われた。「あなたがたは、いつまでわたしの戒めと、律法とを守ることを拒むのか。見よ、主はあなたがたに安息日を与えられた。ゆえに6日目には、ふつか分のパンをあなたがたに賜わるのである。おのおのその所にとどまり、7日目にはその所から出てはならない」。こうして民は7日目に休んだ。(出エジプト記16:22-30)

B. 創造物語

Sabbathの最初の起源は、実は旧約聖書の冒頭、「創世記」の第2章に求められる。

こうして天と地と、その万象とが完成した。神は第7日にその作業を終えられた。すなわち、そのすべての作業を終わって第7日に休まれた〔シャバト〕。神はその第7日を祝福して、これを聖別された。神がこの日に、そのすべての創造のわざを終わって休まれた〔シャバト〕からである。

(創世記2:1-3)

ここにSabbathの起源がある。すなわち、旧約聖書は、天地創造の際にSabbathが制定されたと告げる。Sabbathは、最初から、人類歴史と共に始まったと述べるのである。では、それは何のためだったか。Sabbathは、何のために設けられたのか。

ここで、聖書の中の興味深い表現に注目してみたい。「神は第7日にその作業を終えられた」という言葉である。創造は6日で終わったのではなかったか。天地万物を造る作業は、第6日に全て終了したのではなかったか。いや、そうではなくて、「第7日に」終わったと聖書記者は記すのである。では、第7日にも、何か作業が行われたのであろうか。実は、第7日が安息日とされ、それをもって初めて創造のわざが完成したと、聖書は言っているように思われるのである。

天地創造の物語を、一つの記録として読むとき、すなわち、創造という出来事の記述として読むとき、われわれはそこに、いわゆる6要素(5W1H)がほぼ出そろっていることに気づく¹³⁾。

When (いつ) — はじめに

Who	(だれが) — 神が
Where	(どこで) — この宇宙において
What	(何を) — 天と地を創造した
Why	(なぜ) — ?
How	(どのようにして) — 言葉によって

ただひとつ、Why (なぜ) に答えるものが見当たらない。神はなぜ天地万物を造ったのか。その理由がここには述べられていないように思われるのである。そして聖書の他の箇所を見るとき、ようやくその手がかりが得られる——「天を創造された主、すなわち神であって、また地をも造り成し、これを堅くし、いたずらにこれを創造されず、これを人のすみかに造られた主……」(イザヤ書45:18)。すなわち、天地を造ったのは、「人のすみか」としてであった。確かに創世記1章の記述によれば、すべてを整え環境を整備し、食物も備えて後、最後に、第6日に、人間が造られている。天地が造られたのは、人間を住まわせるためだという聖書の主張は、それなりに筋が通っている。

しかしそれでは、この「人間」はそもそも何のために造られたのか。それは、「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り」(創世記1:26)とあるように、「神は自分のかたちに人を創造された」(同27節)とあるように、いわば、神と向き合う存在、すなわち、神の愛の対象として造られたと、聖書は告げているように思われるのである。これはおそらく、聖書が一貫して主張している点であろう(「わたしたちは、神がわたしたちに対して持つておられる愛を知り、かつ信じている。神は愛である。……」新約聖書・ヨハネの第一の手紙4:16)。さらに言うなら、アウグスティヌス『告白』冒頭のあの有名な言葉——「あなたは私たちを、ご自身にむけてお造りになりました。ですから私たちの心は、あなたのうちに憩うまで、安らぎを得ることができないのです」¹⁴⁾(山田晶氏訳)——も、後半部分が特によく引かれるようであるが、しかし前半部分——神は人間を、自分に向かい合う存在として、すなわち、神の愛を受ける対象として造った、ということ——こそ、アウグスティヌスが言いたかった大前提として、もっと力点が置かれていいのではなからうか¹⁵⁾。アウグスティヌスは、きわめて本質的な点を衝いていると思われるのである。

さて、このように考えてくると、天地創造のWhyの答えは、つまるところ、愛の対象としての人間を創造するため、ということに行き着く。そして、そのことを象徴するのが、第7日目のSabbathだと言えるのである。言い換えると次のようにならうか。つまり、創造は3段階でなされた¹⁶⁾。まず“世界”——人間が生きていけるための環境。ついで“人間”そのもの。そして最後に、“Sabbath”——神と人間との密接な交わりの象徴。それゆえに、第7日のSabbathの制定をもってはじめて、天地創造は完成したと言える。神は、本来の目的である人間との密接な交わりのために第7日に「休まれた」のであり、従って、Sabbathこそ天地創造の真の目的であったと創世記は告げているように思われるのである。

ここで付け加えるなら、聖書の中で、最もきわだった言葉の一つは「聖」(קדש)であろう。他とは区別された、神に属する特別なもの、という意であるが、これが最初に出てくるのはどこか¹⁷⁾。実は、Sabbathに関する記述の中である。「神はその第7日を祝福して、これを聖別された」(創世記2:3)。天地万物が造られたあと、普通なら山とか岩とか、何かを聖なるものとして特別に定めそうなものであるが、聖書は、「第7日」という“時”が聖とされたと告げ

る。神が他の日と区別して、人間のために特にあけた日、人間との密接な交わりのために設けられた特別な日、それが第7日 Sabbathだと聖書は述べるのである。ここにも、Sabbathの持つ重い意味合いが見て取れるように思われる。

C. Sabbathの諸側面

Sabbath本来の基本的な意味は、創造物語に見たとおりであるが、それでは十戒の規定はどのように理解したらよいであろうか。恐らく、次のような要素が含まれていたと考えられる。

① 神礼拝—すべての仕事をやめて、創造者であり救済者である神との交わりにはいるようにという訴え。自分がすべてを神に負っていることを思い起こし、神を覚え神を礼拝せよと告げる。すべては神に属する。時さえも自分のものではない。造られ生かされている者として、神の前に出て、神を礼拝せよというのが、Sabbathの戒めの中心思想であったことは確かであろう¹⁸⁾。

② 人道的側面—「7日目は……なんのわざをもしてはならない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、家畜、またあなたの門のうちにいる他国の人もそうである〔出エジプト記20:10〕、「こうしてあなたのしもべ、はしためを、あなたと同じように休ませなければならぬ」(申命記5:14)。毎週の休みが、家族全員のみならず、奴隷たちにも、家畜たちにも、そして外国人たちにも与えられるというのである。主人も奴隷も、「同じように休む。絶えざる労働があたりまえであった古代において、奴隷は人格など認められていないのが普通であった古代において、これはなんと驚嘆すべき規定であったことか。週休制も、人間の平等も、動物保護さえも、すでにここには含まれていたと言いうるかもしれない¹⁹⁾。

③ 労働の尊厳—「6日のあいだ働いて、あなたのすべてのわざをせよ」。Sabbathの土台には、それに先立つ6日間の労働がある。働くことが命じられているのである。労働は決して卑しむべき下等なことではなくて、神によって命じられた神聖な努めだとしている。こうして、Sabbathの規定には、労働の尊厳という側面も含まれているとすることができるのである²⁰⁾。

D. Sabbath遵守の実際

さまざまな意味内容を持つと考えられるこのSabbathは、それでは現実にどのように守られていたのであろうか。聖書の記述そのものをどう解釈するかという問題ともからんで、容易に判断できる事柄ではないが、ごく大雑把に概観するなら次のようにまとめることができよう。

① 旧約時代²¹⁾

Sabbathの規定は実際にどう守られ、どう行われていたのか、その手がかりを与えてくれるものは、旧約聖書の中のいわゆる「歴史書」と「預言書」であろう。

「歴史書」の中には、Sabbathそのものに関する言及はそれほど多くはないが、注目に値するものがいくつかある。その一つ—

そして夫を呼んで言った、「どうぞ、しもべひとりと、ろば一頭をわたしにかしてください。急いで神の人〔預言者エリシャ〕の所に行って、また帰ってきます。夫は言った、「どうしてきょう彼の所へ行こうとするのか。きょうは、ついたちでもなく、安息日でもない」。彼女は言った、「よるしいのです」。(列王紀下・4:22-23)

子どもが急死して気も動転した女が、あわてて預言者エリシャのもとに助けを求めに行こうとする。それに対して夫は、きょうはついたちでも安息日でもないのに、どうして預言者の所に行くのか、と問うている。

エリシャは紀元前9世紀の預言者であるが、当時は、このように、月初めと毎週の Sabbath には、預言者のもとに行って神の言葉を聞くということが一般的に行われていたのではないかと、推測することができるのである。

さて、古代イスラエルの Sabbath 遵守の実際について、最も明瞭に伝えてくれるものは「預言書」である。預言者らの譴責や警告、勧告等は、そのまま当時の状況を映し出していると見ることができるからである。預言者たちの文書から、主な流れを見ていきたい。

まず、紀元前8世紀のアモスは、こう告げる――

あなたがた、貧しい者を踏みつけ、
また国の乏しい者を滅ぼす者よ、
これを聞け。
あなたがたは言う、
「新月はいつ過ぎ去るだろう、
そうしたら、われわれは穀物を売ろう。
安息日はいつ過ぎ去るだろう、
そうしたら、われわれは麦を売り出そう。
われわれはエバ〔容量の単位〕を小さくし、シケル〔目方の単位〕を大きくし、
偽りのはかりをもって欺き、
乏しい者を金で買い、
貧しい者をくつ1足で買いとり、
また、くず麦を売ろう」。 (アモス書8：4-6)

Sabbath は商売ができないから、不便でしかたがないというわけである。Sabbath の意義などには全く無関心で、ただひたすら Sabbath が早く終わって商売を始められることを待ち望んでいる人々の姿。神を礼拝すべき Sabbath を正しく顧慮しようとせず、むしろ邪魔者扱いする彼らの態度は、そのまま、他者をしいたげるやり方ともつながっているように思われる。

紀元前8世紀後半から7世紀にかけてのイザヤは、神の言葉をこのように伝える――

あなたがたは、もはや、
むなしい供え物を携えてきてはならない。
薫香は、わたしの忌みきらうものだ。
新月、安息日、また会衆を呼んで集めること――
わたしは不義と聖会とに耐えられない。(イザヤ書1：13)

これは明らかに、形式主義に対する譴責である。形だけで、内実の伴っていない Sabbath 遵守が、他の宗教的諸儀式とともに、ここでは批判されている。

なお、イザヤ書の後半には、Sabbath に関する興味深い記述が散見される。その一つをみてみると――

主はこう言われる、
 「わが安息日を守り、わが喜ぶことを選んで、
 わが契約を堅く守る宦官には、
 わが家のうちで、わが垣のうちに、
 むすこにも娘にもまさる記念のしるしと名を与え、
 絶えることのない、とこしえの名を与える。
 また主に連なり、主に仕え、
 主の名を愛し、そのしもべとなり、
 すべて安息日を守って、これを汚さず、
 わが契約を堅く守る異邦人は—
 わたしはこれをわが聖なる山にこさせ、
 わが祈りの家のうちで楽しませる、
 彼らの燔祭と犠牲とは、
 わが祭壇の上に受けいられる。
 わが家はすべての民の
 祈りの家となえられるからである」。 (イザヤ書 56: 4-7)

Sabbathを守ることは、神との「契約」を守ることだと言うのである。そして Sabbath を正しく守る者は、「宦官」であろうと「異邦人」であろうと、何の差別もない。神との密接な関係の普遍性というものが、Sabbath に象徴されているように見受けられる²²⁾。

無関心と形式主義の傾向は、しかしますます嵩じていったらしい。紀元前 7 世紀末から 6 世紀にかけて活動したエレミヤは、こう宣言する—

主はこう言われる、命が惜しいならば気をつけるがよい。安息日に荷をたずさえ、またはそれを持ってエルサレムの門にはいってはならない。また安息日にあなたがたの家から荷を運び出してはならない。なんのわざをもしてはならない。わたしがあなたがたの先祖に命じたように安息日を聖別して守りなさい。しかし彼らは従わず耳を傾けず、聞くことも、戒めをうけることをも強情に拒んだ。

(エレミヤ書 17: 21-23)

紀元前 6 世紀の初め、バビロンに捕囚として連れていかれたユダヤの民のひとりエゼキエルは、神の言葉としてこう告げる—

あなたはわたしの聖なるものを卑しめ、わたしの安息日を汚した。……その祭司たちはわが律法を犯し、聖なる物を汚した。彼らは聖なる物と汚れた者とを区別せず、清くない物と清い物との違いを教えず、わが安息日を無視し、こうしてわたしは彼らの間に汚されている。……それゆえ、わたしはわが怒りを彼らの上に注ぎ、わが憤りの火をもって彼らを滅ぼし、彼らのおこないを、そのこうべに報いたと、主なる神は言われる。(エゼキエル書 22: 8, 26, 31)

神を畏れず、神の安息日を無視し、神に従おうとしなかったがゆえに、神の民はさばきを受けるとエゼキエルは宣言するのである。

さて、バビロンがペルシアによってほろぼされ、捕囚のユダヤ人たちは解放されてパレスチ

ナに帰還を許される。歴史書の一つ「ネヘミヤ記」には、すっかり乱れていた安息日遵守を、もう一度立て直そうとする総督ネヘミヤ（紀元前5世紀後半）の努力が描かれている。

そのころわたしはユダのうちで安息日に酒ぶねを踏む者、麦束を持ってきて、ろばに負わす者、またぶどう酒、ぶどう、いちじくおよびさまざまの荷を安息日にエルサレムに運び入れる者を見たので、わたしは彼らが食物を売っていたその日に彼らを戒めた。そこに住んでいたツロの人々もまた魚およびさまざまの品物を持ってきて、安息日にユダの人々に売り、エルサレムで商売した。そこでわたしはユダの尊い人々を責めて言った、「あなたがたはなぜこの悪事を行って、安息日を汚すのか。あなたがたの先祖も、このように行ったので、われわれの神はこのすべての災を、われわれとこの町に下されたではないか。ところがあなたがたは安息日を汚して、さらに大いなる怒りをイスラエルの上に招くのである」。

そこで安息日の前に、エルサレムのもろもろの門が暗くなり始めた時、わたしは命じてそのとびらを閉じさせ、安息日が終わるまでこれを開いてはならないと命じ、わたしのしもべ数人を門に置いて、安息日に荷を携え入れさせないようにした。これがために、商人およびさまざまの品物を売る者どもは1, 2回エルサレムの外に宿った。わたしは彼らを戒めて言った、「あなたがたはなぜ城壁の前に宿るのか。もしあなたがたが重ねてそのようなことをするならば、わたしはあなたがたを処罰する」と。そのとき以来、彼らは安息日にはこなかった。

わたしはまたレビびとに命じて、その身を清めさせ、来て門を守らせて、安息日を聖別した。

(ネヘミヤ記 13 : 15-22)

こうした努力によって、安息日遵守が回復されていったであろうと推測できるのである。

② 中間時代

いわゆる「旧新約中間時代」については、旧約外典の「マカバイ記」に詳しい。紀元前167年に始まるマカベア戦争の際、最初ユダヤ人たちは安息日には応戦しようとしなかった。だがそれではシリア軍に討ち滅ぼされることは目に見えている。そこで—

マタティアとその同志たちはこれを知って、心から彼らを悼み、互いに言い交わした。「異教徒に対して戦わなかったあの兄弟たちのように、我々も自分の命と掟を守るために戦うことをしないなら、敵はたちまち我々を地上から抹殺してしまうだろう」。こうしてこの日、彼らは協議して言った。「だれであれ、安息日に我々に対して戦いを挑んでくる者があれば、我々はこれと戦おう。我々は、隠れ場で殺された同胞のような殺され方は決してしまい」(マカバイ記—・2 : 39-41。新共同訳)

と決め、それ以後は自衛のため安息日にも武器を取って戦ったことが記されている。当初の、命を守るためであろうと安息日には戦わないとする厳格な安息日遵守、そして現実に直面して軌道修正する彼ら。当時の雰囲気伝わってくるようである。

③ 新約時代

さて新約時代（紀元1世紀）には、Sabbathはどのように守られていたのであろうか。二つのことが挙げられると思われる。

一つは、「安息日になったので、〔イエスは〕会堂で教えはじめられた」(マルコによる福音書6 : 2), 「〔イエスは〕安息日にいつものように会堂にはいり、聖書を朗読しようとして立たれた」(ルカによる福音書4 : 16) などとあるように、Sabbathには会堂に集まるのが一般

的であったということ。これは使徒たちについても、「安息日に会堂には行って席についた」(使徒行伝13:14)とか、「ある安息日に、わたしたちは町の門を出て、祈り場〔川辺に設けられた集会場〕があると思って、川のほとりに行った」(同16:13)、「パウロは例によって、その会堂に入って行って、三つの安息日にわたり、聖書に基いて彼らと論じ」(同17:2)などと述べられていることから明らかである。

もう一つは、しかしこの当時の Sabbath 遵守は、極端な律法主義に陥っていたと思われることである。

人々はイエスを訴えようと思って、安息日にその人をいやされるかどうかをうかがっていた。

(マルコ3:2)

会堂司は、イエスが安息日に病気をいやされたことを憤り、群衆にむかって言った、「働くべき日は6日ある。その間に、なおしてもらいにきなさい。安息日にはいけない」。主はこれに答えて言われた、「偽善者たちよ、あなたがたはだれでも、安息日であっても、自分の牛やろばを家畜小屋から解いて、水を飲ませに引き出してやるではないか。それなら、18年間もサタンに縛られていた……この女を、安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったか」。(ルカ13:14-17)

ユダヤ人たちは、そのいやされた人に言った、「きょうは安息日だ。床を取り上げるのは、よろしくない」。(ヨハネ5:10)

Sabbath の軽視が捕囚という罰を招いたという認識から、ユダヤ人たちは、今度は逆に、神の恩顧を得るために、できるかぎり厳密に、Sabbath を遵守しようとしたわけである。これは同時に、C. Rowland も指摘するように²³⁾、異教異文化の世界のまっただ中で、いかにして神の律法を守っていくかという真摯な努力でもあったろうが、しかし現実には、外に現れた形のみを重視する極端な形式主義に陥ってしまっていた。こうした偏狭な律法主義を打破して、Sabbath を本来の位置に回復しようとしたのがイエスであり²⁴⁾、それがまた律法学者たちの怒りをひきおこすもとともなった。

以上、聖書の記述に沿って、Sabbath の遵守の実際をたどってみた。無関心、形式主義、律法主義と、さまざまに揺れ動いたのが旧約新約時代の Sabbath であったと言える。ではその後、Sabbath はどのような経過をたどって、現代に至っているのか。Sabbath の歴史的展開を次に見ることにしたい。

(以下次号)

注

- 1) Dayan I. Grunfeld, *The Sabbath: A Guide to its Understanding and Observance* (Jerusalem: Feldheim, 1981), p.13.
- 2) 土屋吉正『天の軌跡—暦とキリスト教』(燎葉出版社, 1982年), 17-19頁等参照。
- 3) Lohseの指摘するとおり, "The meaning and content of the OT Sabbath certainly cannot be explained in terms of Babyl. or other non-Israelite models. They are exclusively controlled by Israel's faith in Yahweh." (Gerhard Friedrich, ed. *Theological Dictionary of the New Testament*, vol.7 [1971], p.3). なお以下のものを参照。
Niels-Erik Andreasen, *Rest and Redemption: A Study of the Biblical Sabbath* (Michigan:

- Andrews Univ. Press, 1978), pp.12-19 ; Gerhard F. Hasel, "The Sabbath in the Pentateuch" (Kenneth A. Strand, *The Sabbath in Scripture and History* (Washington, D.C : Review & Herald Publishing Association, 1982)) pp.21-22 ; Harold H.P.Dressler, "The Sabbath in the old Testament" (D.A.Carson, ed. *From Sabbath to Lord's Day : A Biblical, Historical and Theological Investigation* (Grand Rapids : Zondervan Publishing House, 1982)) pp.22-23.
- 4) Abraham E. Millgram, *Sabbath : The Day of Delight* (Philadelphia : The Jewish Publication Society of America, 1944), p.342.
 - 5) 土屋吉正, 前掲書 19 頁。
 - 6) ギッシング, 平井正穂訳『ヘンリ・ライクロフトの私記』岩波文庫 (1961年) 90-91 頁。
 - 7) Harry C. Meserve, "The Creative Pause", *Journal of Religion and Health*, Vol.3 (October 1963), pp.3-6.
 - 8) 宗教社会学の立場からのものとしては, すでに, たとえば市川裕「時間的聖性の創出——ユダヤ教安息日」(宗教社会学研究会編『宗教・その日常性と非日常性』昭和 57 年, 雄山閣, 27-43 頁) などがある。
 - 9) Andreassen, pp.26-27 ; Hasel, p.24 (Strand, ed) ; Dressler, pp.23-24 (Carson, ed). なお שבת と שבוע (7) の直接的関連は現在ではしりぞけられている (Andreassen, p.25 や Hasel, p.24 を参照)。また שבת と שבת のどちらが先かについては明確ではないが, 両者とも共通の語根からきていることはほぼ確実であり, 最初から両者共密接に関連し合っていたと考えられている (Hasel)。
 - 10) 聖書からの引用は, 特に記されていない限り, 日本聖書協会発行の口語訳聖書に拠る。
 - 11) R.A.Cole, *Exodus*, Tyndale old Testament Commentaries (IVP,1973), p.158.
 - 12) P.C.Craigie, *The Book of Deuteronomy*, New International Commentary on the Old Testament (Grand Rapids : William B. Eerdmans, (1976), p.157.
 - 13) Hasel 教授より示唆を受けた。
 - 14) アウグスティヌス, 山田晶訳『告白』(世界の名著・14・中央公論社, 昭和 43 年) 59 頁。
 - 15) Andrews 大学 Raoul Dederen 教授の指摘による。
 - 16) Ahva J.C.Bond, "The Sabbath : God's and Man's," *The Sabbath Recorder* (January 6,1947), Vol.142,No.1, p.5 [Quoted in Herbert E. Saunders, *The Sabbath : Symbol of Creation and Re-Creation* (N. J. : American Sabbath Tract Society, 1970), p.19].
 - 17) ここは Abraham J. Heschel, *The Sabbath : Its Meaning for Modern Man* (N.Y. ; Noonday, 1951), p.9 に拠る。なお, 十戒においても, "聖" という言葉が用いられているのは「安息日」だけである (*Ibid*, p.104 参照)。
 - 18) こうした意味で, 安息日を守るということは神の主権を受け入れることであったと言える (Matitiahua Tsevat, "The Basic Meaning of the Biblical Sabbath", *Zeitschrift für die Alttestamentliche Wissenschaft*, Vol.84 [1972], p.455)。
 - 19) Grunfeld, pp.20-21.
 - 20) *Ibid*, pp.15-16.
 - 21) この部分に関しては, Millgram, pp.342-345, 並びに G.F.Hasel & W.G.C.Murdock, "The Sabbath in the Prophetic and Historical Literature of the Old Testament" (Strand,

ed, pp.44-56) を参考とした。

22) Hasel&Murdock, p.47.

23) C. Rowland, "A Summary of Sabbath Observance in Judaism at the Beginning of the Christian Era" (Carson, ed.), p.54.

24) これは、それ自体綿密な検討を必要とする重要な論点である。この点での示唆に富む考察として次の二つをあげておきたい。一つは M.D.Hooker の見方で、彼は、Sabbath は“回復”というテーマと結びついていると見る。多くのいやしの奇跡を、イエスは、Sabbath に行った、イエスは Sabbath を、回復のわざに特にふさわしい日と見なしていたに違いない、と Hooker は見るのである。(Morna D. Hooker, *The Son of Man in Mark: A Study of the background of the term "Son of Man" and its use in St. Mark's Gospel*, [London: SPCK, 1967], pp.99-102)。もう一つ、J.C. Brunt は、Healing と Salvation と Sabbath は互いに結びついて1つの三角形を成している、Sabbath の中核にはいやしが、すなわち救いが存在する、と見るのである (John C. Brunt, *A Day for Healing* [Washington, D.C; Review & Herald, 1981], pp.52-54)。Hooker と Brunt の主張は、重なり合っている。Sabbath は、“いやし”すなわち“救い”すなわち“回復”の Symbol であり、それだけの意味内容を含んでいる。それほどの深く豊かな意味を持つ Sabbath を、ただの形式的律法に矮小化し、逆に重荷とさえしていた当時の宗教家たちの姿を、嘆き、憤り、真の Sabbath を提示しようとしたのが、イエスであったと言えるであろう。(「イエスがまた会堂にはいられると、そこに片手のなえた人がいた。人々はイエスを訴えようと思って、安息日にその人をいやされるかどうかをうかがっていた。すると、イエスは片手のなえたその人に、『立って、中へ出てきなさい』と言い、人々にむかって、『安息日に善を行うと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか』と言われた。彼らは黙っていた。イエスは怒りを含んで彼らを見まわし、その心のかたくななのを嘆いて、その人に『手を伸ばしなさい』と言われた。そこで手を伸ばすと、その手は元どおりになった。パリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちと、なんとかしてイエスを殺そうと相談しはじめた」マルコ 3 : 1 - 6)。